

# 敦煌本『禪源諸詮集都序』残卷考

田 中 良 昭

## 一 序

圭峯宗密（七八〇—八四一）の『禪源諸詮集都序』に対し、近代の学問的関心が寄せられるに至ったのは、昭和一四年（一九三九）一月、岩波文庫の一冊として、宇井伯壽氏訳註になる『禪源諸詮集都序』が、『中華傳心地禪門師資承襲圖』の訳註を附して、出版されたことによる。宇井氏はこの中で、本文の校定、読み下し文を掲げた後、後記として『都序』及び『承襲圖』の解題と、著者宗密の伝記を付し、本書の書誌学的諸問題についても、詳細な論究を加えられた<sup>(1)</sup>。もっともその前年に当る昭和一三年（一九三八）五月発行の『支那仏教史学』二巻二号に、古田紹欽氏が「圭峯宗密の研究——法系・行状・著作・弟子等に就て——」と題する論文を發表され、特に宗密の著作について、その題名と巻数を記載する諸資料間の異同を、対照表によって詳細に検討された中に、『都

序』に関する考察がなされている<sup>(2)</sup>。

宇井氏による岩波文庫本の出版された翌年の昭和一五年（一九四〇）一月には、同じく岩波書店より黒田亮氏が『朝鮮舊書考』と題して、一六篇の論文を輯録し、出版されたが、その中に、「禪源諸詮集都序について」と題する論文があり、これには『都序』の朝鮮刊本を中心とした書誌学的諸問題が論述されており、また同書中の「禪門寶藏録引用書目」と題する論文の註にも、『禪源諸詮集』と『都序』との関係について論及されている<sup>(3)</sup>。

また宇井氏は、先の岩波文庫本において、『承襲圖』の末尾部分に、一六字詰一八行、二八八字の佚文のあることを指摘されていたが<sup>(4)</sup>、昭和一八年（一九四三）四月、新たに発行された『第三禪宗史研究』の末尾に、「中華傳心地禪門師資承襲圖の佚文について」と題する一篇を付加され、この佚文を知訥の『法集別行錄節要并私記』によって補うと共に、『都

序』についても若干の考察を加えられた。<sup>(5)</sup>

このように、『都序』は、昭和一四年（一九三九）を中心とした前後数年間にわたって、古田氏、宇井氏、黒田氏等の諸学者によって、にわかに関心を集められたのであるが、その後には長い間『都序』に関する注目すべき研究がみられなかった。

ところが、近年、禅の語録の訳註、現代語訳、影印本の出版等の気運が急速にたかまるに至り、筑摩書房の「禅の語録」シリーズ全二〇巻中の一巻として、『都序』がとりあげられたことは、『都序』に対する学問的関心を再び喚び起す上に、大きな役割を果たした。すなわち昭和四六年（一九七二）一二月に、「禅の語録」シリーズ第九巻として、鎌田茂雄氏によって『都序』の訳註が出版されたのをはじめとして、同じく鎌田氏による大著『宗密教学の思想史的研究』が、昭和五〇年（一九七五）三月出版された。この著作は、著者自らその序の中に<sup>(6)</sup>、

宗密教学の全體像を総合的に把握することを意圖するとともに、その思想史的教學を明らかにすることをめざしたものである。

と述べておられるように、宗密教學を総合的に体系化されたものであり、その第四章には、「教禅一致説の形成——特に『禅源諸詮集都序』について——」と題して、宗密が教禅一致を主張した根本資料としての『都序』について、詳細な論

究をされると共に、その附節として、先の「禅の語録」シリーズに『都序』を訳註されるに際して、鎌田氏が底本とされた東洋文庫所蔵の萬曆四年（一五七六）刊『禅源諸詮集都序』を中心とした書誌学的諸問題が論述されている。<sup>(7)</sup>

このように、近年、鎌田氏によって『都序』の研究は大きな前進をなしとげたのであるが、ここでは、こうした諸先学の秀れた研究成果をふまえつつ、新たに出現した敦煌本『禅源諸詮集都序』の残巻を紹介し、その特色、系統等について考察すると共に、その残巻の巻末に発見された宗密の著作目録に関する新資料について、これを検討してみようと思うのである。

## 二 従来の『禅源諸詮集都序』の諸本とその流傳

圭峯宗密の著作については、新出の敦煌本『都序』の末尾に付された著作目録とも関連して、後に改めて考察するが、彼の六一年の生涯を通じてなされた数多くの著作の中で、『都序』は宗密の教禅一致説を述べた代表作であり、それが著わされたのは、

早くとも太和七年（八三三）五四歳の時<sup>(8)</sup>

とか

太和七年（八三三）以後<sup>(9)</sup>

といわれる通り、宗密が既に円熟した境地に達した以後のこ

ととされている。

ところで、この『都序』のその後の流伝について記すものに、『都序』の宋版後記と爲霖道霈(一六一五—一七〇二)の識語がある。今それらの記事について述べるに先立ち、『都序』の宋版及び爲霖道霈について触れておきたい。

まず『都序』の宋版で現存するものには、明の弘治六年(一四九三)重刊本と明の萬曆四年(一五七六)重刊本とがある。弘治六年本は、朝鮮全羅道高山地佛名山花岩寺での開板で、現在柳田聖山氏の所蔵になり、昭和四九年(一九七四)二月、柳田氏主篇の『禅学叢書』の二として、『禅門撮要』『法集別行録節要』と共に、中文出版社から影印にて覆刻出版された。

一方、萬曆四年本は、同じく朝鮮の俗離山觀音寺での開板で、黒田氏の『朝鮮舊書考』によれば、黒田氏と大塚鎧氏の所蔵とされているが、東洋文庫にも現存し、鎌田氏が筑摩書房の「禅の語録」シリーズに『都序』を訳註するに際して、底本とされたのがこの東洋文庫蔵の萬曆四年本である。しかもこの弘治六年本と萬曆四年本とは同一系統のものである。

次に爲霖道霈についてであるが、彼は明代に鼓山に生まれ、『明版大藏經』の南藏本、楞嚴(寺)本、雲棲本の『都序』三本を得て校合し、板行した人である。それに更に喜雲が訓点を付して元禄一〇年(一六九八)に刊行したのが、『大正藏經』

の校合本として用いられた元禄本で、これには道霈と喜雲の識語がある。

さて本論に戻って宋版後記と道霈の識語の内容についてみてみよう。宇井氏によれば、この両者の記事は一致するといふことであるからして、<sup>(10)</sup>今は萬曆四年刊の宋版によった鎌田氏訳註本によってその本文を示してみよう。

#### 後記

唐大中十一年丁丑歲、裴相親筆寫本、付与金州武當山太一延昌寺老宿、得五十年收掌。大梁壬申、老宿授与唯勁禪師、歸湖南。又得廿三年至甲午、禪師授与契玄歸閩。又經廿二年至甲寅乙卯、賈入吳越、書寫施行矣。

福州沙門契玄<sup>(11)</sup>錄

唐の大中十一年丁丑の歲(八五七)に、裴休が親しく筆寫した『都序』の親筆本を、金州武當山太一延昌寺の老宿に付与し、五〇年後(實際は五五年後)の大(後)梁の壬申すなわち乾化二年(九一二)に、その老宿が唯勁禪師に授与し、湖南に帰った。またそれから二三年(實際は二二年)を経た甲午、すなわち後唐の應順元年或いは清泰元年(共に九三四)に、唯勁禪師は契玄<sup>(12)</sup>に授与し、閩に帰った。更にまた二二年(實際は二〇年乃至二一年)を経た甲寅乙卯、すなわち後周の顯德元年甲寅(九五四)乃至二年乙卯(九五五)に、契玄も吳越に入つて書寫し施行した。

福州の沙門契玄録す。

ところで宋版後記の方は、この後に二行にわたつて、

大宋錢塘嚴明男、嚴楷勾當雕開板

とあり、大宋、錢塘の嚴明の男嚴楷が、勾當(事務を担当)し、雕して開板したといういわゆる宋版刊記を附しているが、今問題の後記は、福州の沙門契玄が録したものである。

これによると、宗密の示寂は八四一年であるからして、裴休が書写したのは、宗密滅後一六年のことであり、その裴休親筆本が、およそ百年間に、裴休―延昌寺老宿―唯勁禪師―契玄と四人の手を経、更に契玄はこれを書写して施行させたというのである。この唯勁は、雪峰義存(八二二―九〇八)の弟子で、開平年間(九〇七―九一〇)に『續寶林傳』や『南嶽高僧傳』を著わした南嶽惟勁を指すとみられ、<sup>(13)</sup> 閩に帰ったというのは、彼が元來福州の人であったためであり、契玄が行って書写し流布させたという呉越も、南シナの東南地方であるからして、この裴休書写本の流伝は、シナ南地への流伝とみてよからう。

従って後記による限り、宋版はこの南地流伝本に基くものであることを窺わしめるのであるが、一方、『明版大藏經』に収録されたいわゆる明藏本には、その巻首に、「重刻禪源諸詮序」と題する宋版にない三種の序文が付されている。すなわち、無外惟大の序、鄧文原の序、賈汝舟の序である。今流伝について関説するのは、後の二者であるが、その内鄧文原の序をみると、先の宋版後記と関連して、

(前略)唐大中時、裴相國休、爲之叙、復手書是圖、付金州延

昌寺。後傳唯勁師、再傳玄契師。而圖行閩湘吳越間。<sup>(14)</sup>

唐の大中(八四七―八六〇)の時、相國裴休が之(『禪源詮』)に叙を爲し、またこの圖を手書して金州延昌寺に付した。後、唯勁師に伝え、再び玄契師に伝え、而して圖は閩湘吳越の間に行われた。

とある点に注目される。特に宋版後記では、「裴休が親しく筆受した本」というのを、序では、「之(唐の圭峯禪師の作りし禪源詮)に叙を爲し、または是の圖を手書し」といい、従って「圖が閩湘吳越の間に行われた」というのである。すなわち前者では、裴休が自ら筆写したのは、『都序』そのものとみられるのに、後者では、裴休は『都序』巻首の叙をなすと共に、自ら手書したのは圖であり、その手書した圖が南地へ伝えられて閩湘吳越の間に行われたという相異を示している。

この圖というのは、『義天録』に宗密述として『起信論注釋』の最後に記す『一心修證始末圖一卷』を指すものとされ、<sup>(15)</sup> 同一の題名は『佛典疏鈔目錄』にもあり、『圭峯禪師碑銘』『宋高僧傳』に、「修證圖」とあるのと同じのもので、『義天録』の記載からして、『起信論』の圖とみられている。<sup>(16)</sup> また後述する如く、この圖は、新出の敦煌本に「起信圖」というのと同じであろう。

とにかく南地への伝承が、『都序』そのものか、その内の圖のみであるかは、早急には決し難い問題であるが、前記の

経録、碑銘、僧傳等に、『一心修證始末圖』『修證圖』更には『起信圖』として別立されていることは、『都序』の他に圖のみが別行され、單行されて、少なくとも『一心修證始末圖』と題する一卷として、朝鮮にも伝わっていたことが明らかになったのである。

序はついで次のようにいう。

國朝至元十二年、世祖御廣寒殿、顧問禪教要義、帝師及諸耆德以禪源詮對。上意悅、命板行於世。後二十有九年爲大德癸卯、嗣法雪堂仁禪師、奉旨之五臺、回途過大同、得金時潛庵覺公禪師所書圖、益加考訂、鍍梓以傳諸遠、俾圭峯禪師研眞顯正、化導羣迷之意、永久不墮。<sup>(17)</sup>（後略）

元の至元一二年（一二七五）に、世祖が廣寒殿に御せられ、禪教の要義を顧問されたので、帝師及び諸の耆德が『禪源詮』をもつて對えた。それが天子の意にかなひ、世に板行することを命ぜられた。その後二九年（實際は二八年）して、大德癸卯すなわち七年（一三〇三）となり、法を嗣いだ雪堂普仁禪師が、天子の旨を奉じて五臺にゆき、回る途次大同を過ぎて金の時代に潛庵覺公禪師が書写したところの圖を得、益々考訂を加え、梓に鍍んでもつて諸を遠きに伝え、圭峯宗密禪師の眞を研ぎ正を顯わし、群迷を化導しようとの意志を永久に墮ちないようにした。

この部分は、元の至元一二年（一二七五）以後の北地での板行のことを記したものであるから、先の大中一一年（八五七）から顯徳元年（九五四）乃至二年（九五五）にわたる書写本の南

地への流伝の記事とは、直接の関係はないと考えられる。ただここでも、大德七年（一三〇三）雪堂普仁が大同で得たという潛庵覺公が書写したものは、やはり圖であつて、この圖に考訂を加えて上梓したとしている。

更に、今一つの序である賈汝舟の序をみると、

雪堂禪師……（中略）……幸得圭峯所述禪源詮、其文博雅、其旨切當、悉叙前所患者、道其所以然、且作圖、示心一眞實諦含三大義、無明緣染諸相妄起、依修斷法獲證入理、提綱舉要如指諸掌。<sup>(18)</sup>

雪堂禪師は……（中略）……幸にも圭峯宗密禪師の述べられた『禪源詮』を得たが、その文は博雅で、その旨は切當であり、悉く前に思われた者を叙べ、その然る所以を道い、且つ圖を作つて心の一眞實諦にして三大の義を含み、無明、染に緣つて諸相妄に起り、斷法を修するに依つて理に証入するを獲ることを示し、綱を提げ要を擧げて諸を掌に指すが如し。

といつて、雪堂普仁が圭峯宗密禪師の『禪源詮』を得たが、その文字主旨共に秀れたものであり、且、宗密が作った圖もよくその綱要を表わし尽していることをたたえている。

その後は、先にみた至元一二年（一二七五）春正月の記事で、世祖が在京の耆宿を召して諸の禪者の垂互する義を問ひ、先師西庵贊公等八人が、圭峯宗密禪師の『禪源詮』の文を以つて對をなしたところ、宸衷に充愜し、當時先師西庵贊公は、その弟雙泉泰公に囑してこれを記録させ、雪堂に命じ

て板に鏤めて流行させた、という。これは先の鄧文原の序をやや詳細に述べたものとみられるが、これに続いて雪堂が重刻した経過を述べる部分がある。

愚、以参問諸方、未暇及此。向於雪中普恩興國二寺、各獲一本、後在京萬壽方丈、復得遼朝崇天皇后清寧八年印造頒行天下定本、與文士較正、擬欲刻梓、以傳永久。<sup>19)</sup>

私（雪堂普仁）は、諸方を参問せるを以って、いまだ此に及ぶ暇あらず。さきに雪中の普恩、興國の二寺において各一本を獲、後に京の萬壽寺の方丈に在って、また遼朝の崇天皇后が清寧八年（一〇六二）に印造して天下に頒行した定本を得、文士とともに較正し、擬して梓に刻し、永久に伝えんと欲す。

すなわちこれによると、雪堂は先師西庵贊公の命によって板に鏤めなければならなかったが、諸方参問の旅に出ていてこの仕事にかかる暇がなかった。しかし雪中の普恩寺と興國寺とで各一本ずつを得、のちに京師の萬壽寺の方丈で遼の清寧八年（一〇六二）に刊行した定本を得た、というのである。

先の鄧文原の序では、雪堂が天子の旨を奉じて五臺に行き、かえる途次大同を過ぎて、金代に潛庵覺公の写した圖を得、これに考訂を加えて上梓したというからして、この兩者を総合すれば、雪堂普仁は、京の萬壽寺で得た遼の清寧八年刊本を底本とし、それに普恩寺、興國寺で得た各一本や、大同で得た潛庵覺公の写した圖等を校合して、元の大徳七年（一二三〇）に刊行したということになる。そしてこれが四卷

本として『明版大藏經』にはじめて入藏され、この明藏本が後に『縮刷大藏經』や『大正新脩大藏經』に編入され、宇井氏の校注になる岩波文庫本の底本とされるに至ったのである。

一方、宇井氏が校合の第一とされた『統藏經』本には、上記三人の序に更に天台の玄極居頂による『重刊圭峯禪師禪源諸詮集都序疏』が加えられている。従って『統藏經』本は、雪堂普仁による大徳七年刊本に、更に京極居頂の序を加えた重刊本を収録したものであり、同じくこの系統の単行本としては、光緒一八年（一八九二）本がある。

朝鮮での開板については、先に宋版である弘治六年（一四九三）本と萬曆四年（一五七六）本を挙げたが、それ以外で現在駒沢大学図書館に収蔵されているものに、崇禎七年（一六三四）本と康熙二五年（一六八六）本の二本がある。前者は支提山天冠寺での開板であり、後者は金華山澄光寺における前者の重刊本であって、共に上下二卷からなる。宇井氏が校合の第二として用いられたのは、崇禎七年本である。

また日本での板行については、先に元禄十一年（一六九八）刊行の上下二卷からなる元禄本をあげたが、これは宇井氏が校合の第四とされたものであり、今一つ、校合の第三とされたものに、年代は不詳であるが、京都の田原仁左衛門氏が刊行した同じく上下二卷からなる田原本がある。黒田氏によれ

ば、この田原本は、延文三年（一三五八）京都天竜寺の雲居庵にて、春屋妙葩が刊行した五山版本によったものか、とされ（20）ており、後述する如く『都序』の尾部にある「悟りと迷いの圖式」が、他の諸本と全く異なる点に特色がある。

以上の考察によって、『都序』には、その成立以来、シナ、朝鮮、日本にわたって数多くの刊行がなされ、その流伝の間に様々な発展のあったことが知られるに至った。ところで新出の敦煌本『都序』は、これら諸本といかなる関係にあるであろうか。以下それらについて考察を進めることにしたい。

### 三 敦煌本『禅源諸詮集都序』残卷の出現

台湾国立中央図書館所蔵の敦煌写本については、昭和四四年（一九六九）春、台湾の宗教事情を調査された牧田諦亮氏が、同年六月大正大学における第二〇回日本印度学仏教学会で、現地調査の結果を「台湾中央図書館所蔵の敦煌写経録」と題して報告し、更に『印度学佛教学研究』一八巻二号に、「台北中央図書館の敦煌経」と題して、その概要を発表された（21）。報告の際に配布された『台湾国立中央図書館敦煌写経類目録』（『牧田目録』）には、全部で一四五種の経題、巻数、紙質、紙数が列記され、禅宗文献とみられるものとして、その六四番目に『大悲禅門偈』（22）の名を挙げられた。

この牧田氏の論文によると、中央図書館所蔵の敦煌経につ

いては、まず『中央図書館甲庫善本目録』に著録され、これが昭和三七年（一九六二）北京商務印書館で刊行された『敦煌遺書総目索引』に、「敦煌遺書散録」中の「前中央図書館蔵巻目」として転載されたが、それには六六種をあげ、ついで昭和四三年（一九六八）香港の潘重規氏が、『新亞学報』八巻二期に、「国立中央図書館所蔵燉煌卷子題記」として、その後増加したものを含めて全貌を紹介された。更に現在、台北中央図書館の敦煌経は、同館編印になる『国立中央図書館善本書目増訂本』の子部积家類中に、

右积家類三百八十三部一万二千四百三十卷三千六百十五冊別卷子一百六十一卷内不分卷者十部。

と記すなかに混入されており、この卷子一六一巻のほとんどが敦煌経であるという。

ところで、今問題の『都序』の残卷についてであるが、『敦煌遺書総目索引』の六六種中、及び『牧田目録』の一四五種中には、その名の見出せないものである。ただ当時潘氏の論文が未見であったために、その中に著録されているかどうかは不明であったが、たまたま近年東洋文庫に収蔵された、台湾の国立中央図書館蔵敦煌文献の写真を調査した際、フィルム番号〇八九一五に『大悲禅門偈』（擬）があり、それに続く〇八九一六に『都序』残卷の存在を知った次第である。従って『都序』については、如上の考察からして、『増

訂本』の一六一種から『牧田目録』の一四五種を差引いた一六種中の一本ではないか、と推定したのであるが、その後呉其昱氏のご厚意により、昭和五〇年（一九七五）一二月、香港の敦煌学会の編印になる『敦煌学』二輯をみる機会を得、そこに潘氏が先に『新亜学報』八卷二期に発表された「國立中央圖書館所藏敦煌卷子題記」と題する論文が移録され、全体で一四四種を挙げる内、その第一三三番に『大悲禪門偈』、第一三三番に『都序』に関する記載のあることを知った。<sup>(23)</sup> 因みにこの論文集には、先述の牧田氏の論文が楊鍾基氏によって中国語訳され、「臺北中央圖書館之敦煌經」と題して収載されている。<sup>(24)</sup>

この新たに出現した『都序』の写本の形態及び内容の概略については、前述の潘氏の記述が参考になる。今それを示すと左の通りである。

【一三三】第二冊第六九八頁第八行

大乘禪門要略一卷 五代 後周 廣順 二年（九五二） 寫卷子本 卷下

白紙、九紙、每紙行數字數不等、凡存一百八十餘行。紙幅參差不齊、首紙幅高約三十公分。

起：「住法界、感而即通、名大覺尊。」

訖：「禪源諸詮集都序卷下、後鈔圭峯大師所纂集著、訖「都總二百五十卷圖面。」 卷尾有題記云：「廣順二年三月十日、從京來漢大師智清本上、抄寫大乘禪門要錄一卷。」此卷原作「大乘禪門要略一卷 不著撰人、五代後周廣順二年釋智清 卷子本、」蓋誤。按

題記意、智清非寫經人、大乘禪門要錄亦非此卷經名、蓋此卷末紙中有標題曰：「禪源諸詮集都序卷下」可證。

參大正藏：第四十八卷諸宗部、二〇一五號、四一〇頁上二行、四一三頁上。

まず写本の形態に関する記載をみると、

白紙で九紙からなり、各紙の行数、字数は不同で、凡そ一八〇余行あり、紙幅にも相違があつて第一紙の縦は約三〇公分である。

という。これは写真からも窺えることであつて、特に第二紙から第六紙にかけての五紙にわたる図式の部分は、各紙の大きさが極端に異なり、第三紙は縦横が逆に、また第七紙と第八紙は前後が逆に貼りつけられている。

次に内容についての記載によると、

首部は「住法界、感而即通、名大覺尊。」で始まり、尾部は「禪源諸詮集都序卷下」とあつて、その後に圭峯大師の纂集、著するものを鈔し、「都總二百五十卷圖面」で訖っている。卷尾には題記があつて、これには「廣順二年三月十日に、京より來れる漢大師の智清が、『大乘禪門要錄』一卷を抄寫した。」という。この卷は、元来「大乘禪門要略一卷。撰人を著わさず、五代後周廣順二年、釋智清の卷子本」とされていたが、これは恐らく誤りで、題記の意味を按ずれば、智清は写經人ではなく、「大乘禪門要錄」というのも亦この卷子の經名ではない。恐らくこの卷子の末紙の中にある標題の「禪源諸詮集都序卷下」がこれを証しうる。大正藏經第四八卷諸宗部、二〇一五號、四一〇頁上段二行、四一三頁上段を参照すべし。



というものである。

今、この記述及び東洋文庫蔵の写真によってその内容を検討してみると、敦煌本『都序』は、鎌田茂雄氏の訳註になる『禅源諸詮集都序』が、全体を五八項目に分類する内の五二項中途より、卷末五八項までに相当する。すなわち首部の「住法界、云々」は、鎌田氏訳註本の五二項に該当し、それ以降末尾までが存在するのであるが、写真第二葉と第六葉の二ヶ所には、五二項に先立つ五〇項の一部が挿入されるという複雑さを示している。従って、敦煌本『都序』とはいっても、実際は尾部の残巻にすぎず、しかも他本との文字の出入はかなり多い。

尾部については、先の潘氏の記述の通り、本文の後に

圭峯大師所纂集著経律論疏集注解文義及圖等件列于左。

として、四〇種にわたる宗密の著作目録と、

廣順二年三月十日從京來漢大師智清本上、抄写大乘禅門要録一卷。

という題記があるが、この著作目録と題記については、後に改めて検討することにした。

尚、この『都序』を含む台湾国立中央圖書館所蔵の敦煌卷子のすべての影印が、民国六五年（一九七六）一月、台北の石門圖書公司から『国立中央圖書館所蔵 敦煌卷子』全六冊として印行された。この内『都序』はその一三三（一二三七—一二四一頁）に存するからして、それによって内容を窺うこと

も可能である。

以下敦煌本『都序』の本文を示してみよう。

#### 四 敦煌本『禅源諸詮集都序』残巻の本文

凡例

一、本文は敦煌本の原本を原文のまま記し、萬曆四年（一五七六）宋版重刊本に依る鎌田氏校定本〔筑摩書房禅の語録9『禅源諸詮集都序』〕の異同を脚注で示した。但し、分類項目は、鎌田氏校定本のそれに依った。

一、原本にある細字雙行の夾注は、本文中に「」で示した。

一、原本の判読困難乃至は貼り合わせの関係で欠落したとみられる部分は、□で示した。

一、「五四」悟りと迷いの図式は、煩を去けるため敦煌本の本文をそのまま記し、鎌田氏校定本との異同は注記しなかった。また原本の図式の体裁は、ここに示したものはかなり異なるが、鎌田氏校定本との比較を容易にするために、それに合わせて体裁を改めた。しかし内容的にはここに示したものと異なるものではない。従って、両者の異同は、本文と鎌田氏校定本の同一箇所（二三三—二三六頁）とを対照すれば、自ら明らかになる。

〔五二〕 悟りへの道

（首欠）住法界、感而即通、名大覚尊佛\*。佛

佛ナシ

無異佛、是本佛、無別新成。故普見一切衆生、皆同成等正覚。故迷与悟各有十重、順逆

相翻、行相甚顯。次之第一對前一二、此十合前一。餘八皆從後逆次翻破前八。一中悟前第一本覺、翻第二不覺。前以不覺乖於本覺、真妄相違兩重、今以悟則冥相符相順、無別始悟故、合爲一。又若據逆順之次、此一合翻前十、今以頓悟門中、理須真認本躰、翻前本迷故、對前第一第二。〔上云參若即此是也。〕二中由怖生死之苦、發三心自度他故、對前第十六道生死、三修五行翻前第九造業、四三心開發翻前第八三毒、〔悲心翻瞋、智心翻癡、願心翻貪。〕五證我空翻前第七我執、六證法空翻前第六法執、七色自在翻前五境界、八心自在翻前第四我見、九離念翻前三念起。故十成佛佛無別躰、但是始覺、翻前第二不覺、合前第一本覺。始本不二、唯是真如顯現、名為法身躰覺。故以初悟無二躰也。順逆之次參差、正由此矣。一即因該果海、十即果徹因源。涅槃經云、發心畢竟二不別。花嚴經云、初發心時、即德阿耨菩提。正見此意。

〔五三〕悟りと迷いの体系を图示する理由然須順逆相對、前後相照、義照彰、然猶恐文不頓書、意不並顯、首尾相隔、不得齊觀。今畫之為圖、令凡聖本末、大藏經宗、一時現於心境。此圖頭在中心、云衆生心三字是也。從

次ハ此  
一ハ第一  
第二ハ前第二  
兩重ハ故開為兩重、則ハ即相ハ符冥  
爲ハ之爲

真ハ直  
第ナシ、云ハ法、若ハ差

第五ハ前第五  
我ハ能、故ナシ

順ハ大、以ハ与、順逆ハ逆

盤ハ槃、花ハ華  
德ハ得、見ハ是

須ハ難、順逆ハ逆順、義照ハ法義昭然ナシ  
顯ハ現

境ハ鏡、心ハ間

此三字讀諸兩面。朱畫表淨妙之法、墨畫表垢染之法、一一尋血脈詳之。朱爲此号、記淨法十重之次、墨爲此号、記染法十重之次、此号是本論之文、此點是義說論文。

〔五〇〕仏と衆生、悟と迷との關係

〔首欠〕〔已〕前第五案内欠本不同。未曾暫闕。但隨緣門中、凡聖無定。謂本來未曾覺悟故、說煩惱無所、若不收證、即煩惱斷盡、故說有終。然實無別始覺、亦無不覺、畢竟平等。故此一心法尙有真妄二義、故常具真而生滅二門。各二義

（この間に 〔五四〕悟りと迷いの図式あり）

名、真有不變隨緣〔已〕上前一句同後一句同（以下欠）

（以下第七紙と第八紙が逆に貼りつけられているが、鎌田氏校定本によって之を改む）

（第八紙）

〔五五〕悟りと迷いの図式によって反省自覺すべきこと

諸ハ之分向、面ハ畔

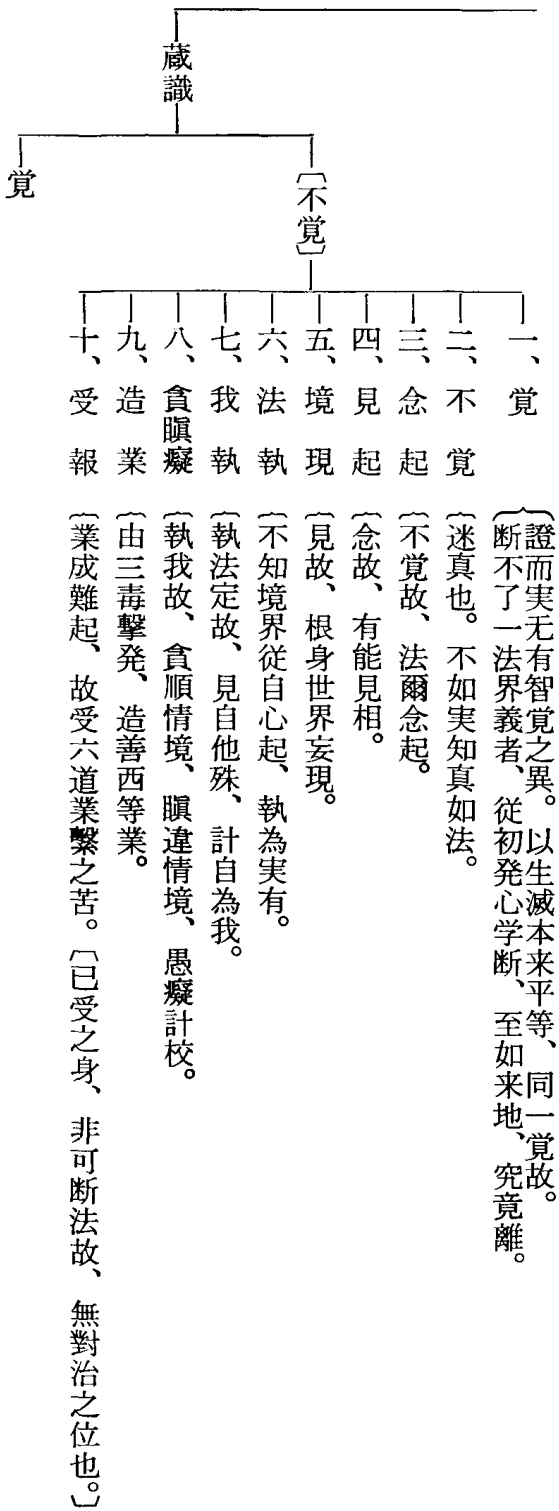
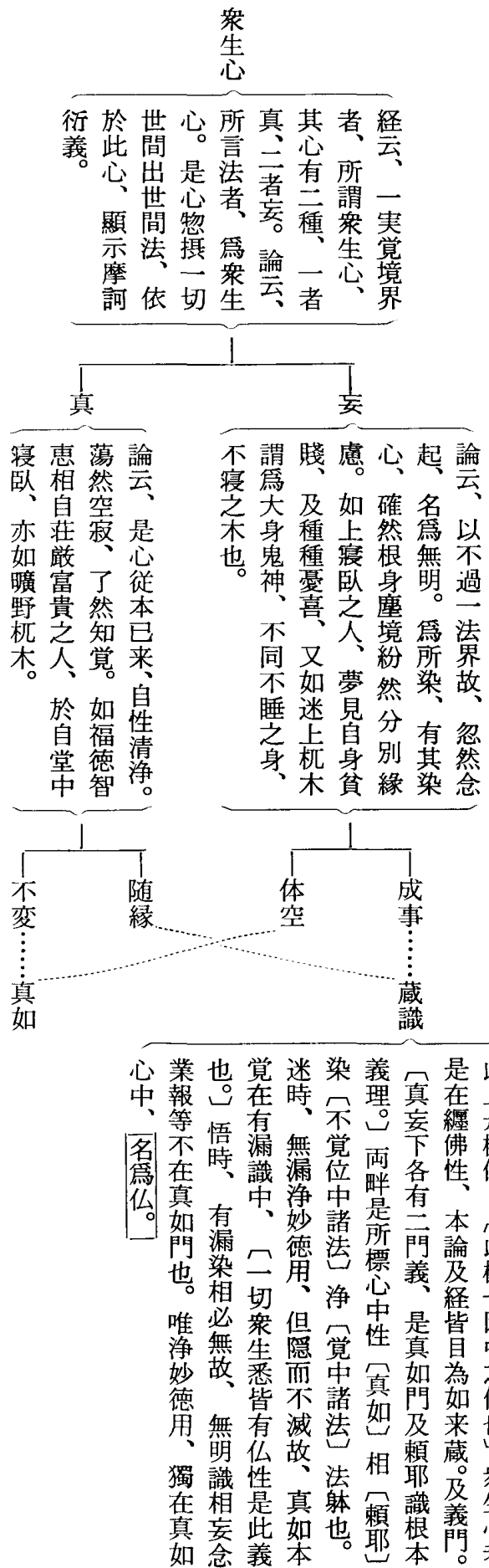
已以下ノ注ナシ

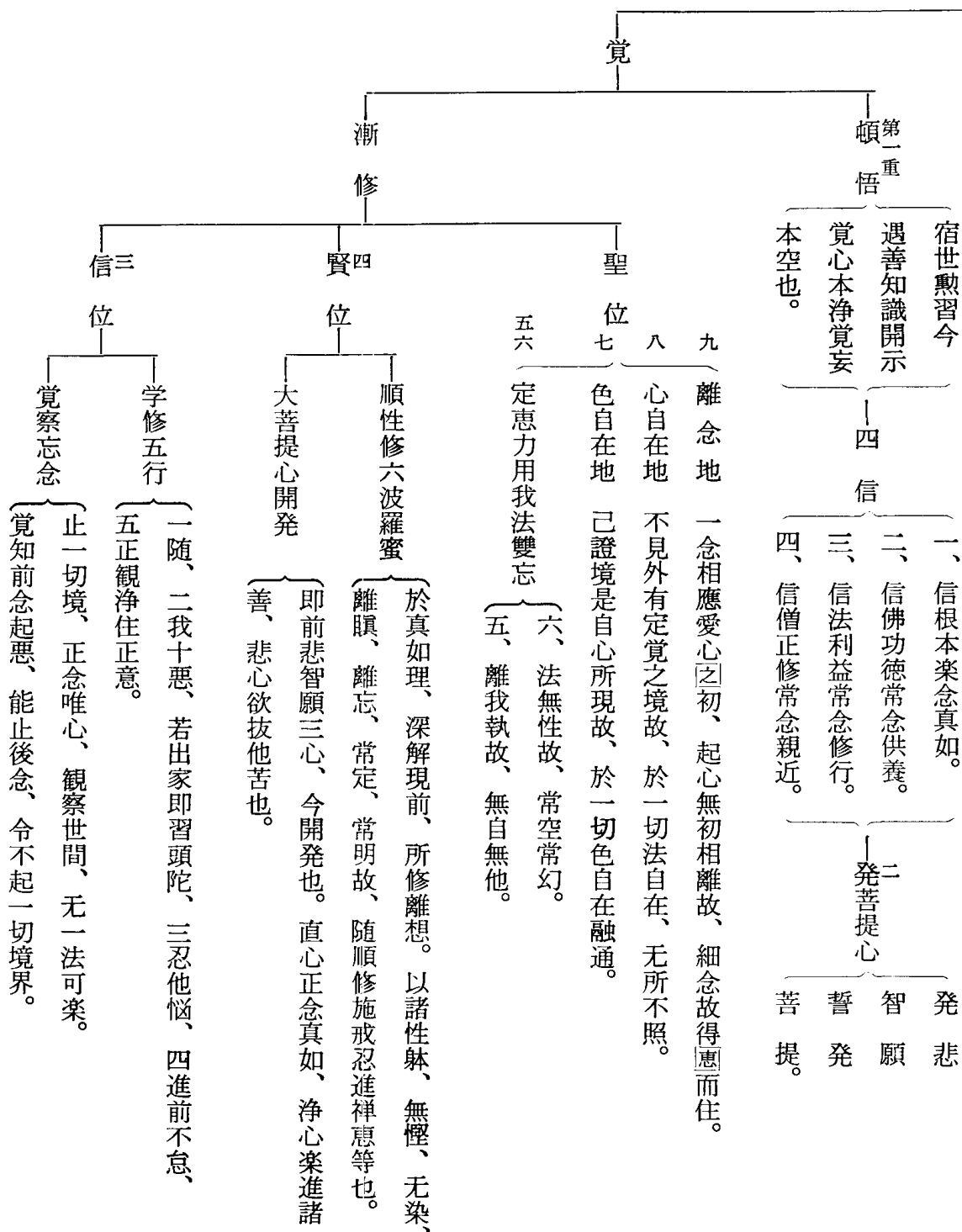
所ハ始、不收ハ修

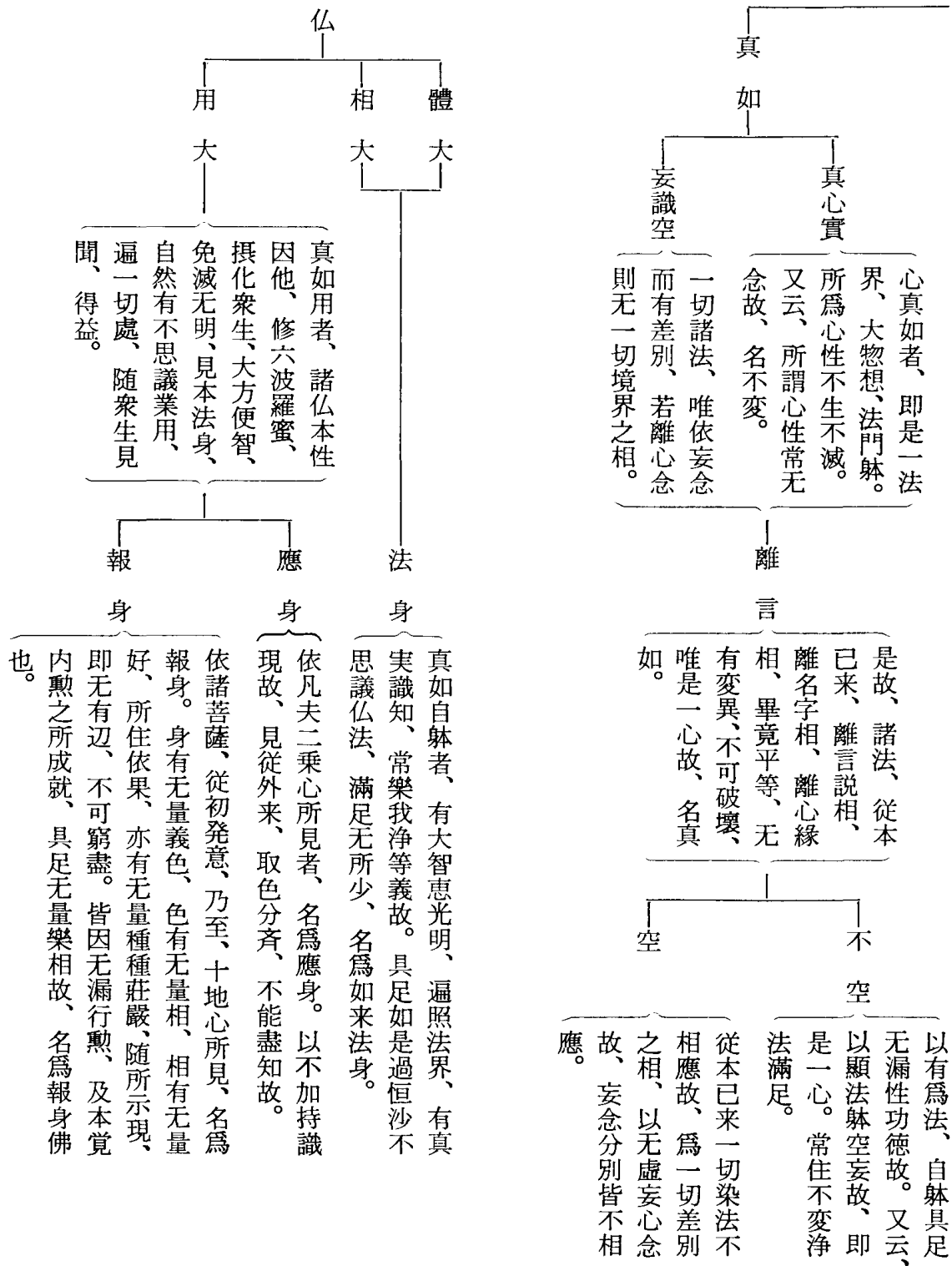
故ハ二義復各二義故、而ハ

名ハ者、已以下ノ注ナシ

〔五四〕 悟りと迷いの図式







詳究前述、諦觀此圖、對勘自他、及想賢聖、

為同為異、為妄為真、我在何門、佛在何位、

為當別躰、為復同源。即自然不執着於凡夫、

不讚濫於聖位、不耽滯於愛見、不推讓於佛心

也。然初十重是一藏經所治法身中、〔第一重〕

煩惱之病生死元由、〔次二重〕 漸漸加僧、

〔我法二執〕 乃至龜重、〔三毒造業〕 惠

滅〔受報〕之狀。後十重是法身信方服藥、

〔前三重〕 汗出病差、〔菩提心開發〕 將

治方法、〔六波羅蜜〕 漸漸減退、〔從六至

九〕 乃至平復、〔成佛〕 如有一人、〔在

纏法身〕 諸根具足、〔恒沙功德〕 強壯、

〔常住不變、妄不能染〕 多藝、〔恒沙妙

用〕 忽然得病、〔無始無明〕 漸漸加增、

〔其次七重〕 乃至氣絕、〔第十重〕 唯心

頭暖、〔阿賴耶識中無漏智種也〕 忽遇良醫

〔大善知識〕 知其命在、〔見凡夫人即心是

佛〕 強灌神藥、〔初聞不信、頻說不捨〕

忽甦醒、〔悟解〕 初未能言、〔初悟人不能

說法、答他問難、悉未能也〕 乃至漸語、

〔能說法也〕 漸能行履、〔十地十波羅蜜〕

直至平復、〔成道〕 所解妓藝、無所不為。

〔神通光明一切種智〕 以法一一對合、何有

疑而不除也。即知一切衆生不能神變作用者、

但以業識或病所拘、非已法身不具妙德。今愚

賢聖ハ聖賢

讚ハ僭

死ハ起、二ハ三、僧ハ增

汗出ナシ

治ハ理、滅ハ減

重ハ重也

阿ナシ

甦醒ハ然蘇醒、不能ナシ

能ハ的

履ハ季、蜜ハ蜜也

道ハ仏、妓ハ技

疑ハ疑事、變ハ通

或ハ惑

者難云、汝既頓悟即佛、何不教光寺者。何殊

令病未平復之人、便作身上本藝。然世醫處方

必先候脈。若不對病狀輕重、何辯方書是非。

若不約痊愈深淺、何論將治法則。法醫亦爾。

〔五六〕 修道の心がまゑ

故今具述迷悟各十重之本末、將前經論、統三

種之淺深、相對照之。如指其掌。勸諸學者、

善自安心。行即仕隨寄一門、解即須通達無碍。

又不得慮其偏局、便莽蕩無所旨歸。須洞鑑源

流、令分菽麥、必使同中見異、異處而同。鏡

像千差、莫執好醜、鏡明一相、莫忌青黃。千

器千金、唯無阻隔、一珠千影、元不混和。建

志運心、等虛空界、防非察念、在毫釐間。見

色聞聲、自思如嚮否、動身舉意、自料為佛法

否、姜饅糲喰、自想無嫌愛否、炎涼凍暖、自

看免避就否、乃至利衰毀譽稱譏苦樂、一一審

自返照、實得情意一種否。必若自料、未得如

此、即色未似影、聲未似響也。設實頓悟、修

須漸修。莫如窮人、終日數他寶、自無半錢分。

六祖大師云、佛說一切法、為度一切心、我無

一切心、何須一切法。今時人但將此語、輕於

聽學、都不見觀實無心否。若無心者、八風不

能動也。設習氣未盡、瞋念任運起時、無打罵

教ハ放、寺ナシ

深淺ハ淺深、治ハ理

仕ハ任

旨ハ指、須ナシ

千ハ一、唯ハ雖

虛ハ虛

嚮ハ響

姜ハ美、喰ハ滾

修ハ終

窮ハ貧窮

見ハ自、若ナシ

雖ハ譬

營盛時、無疾妬求勝心、一切時中、於其自己無憂飢凍心、無恐人輕賤心、乃至種種此等、亦得名為無一切心也。此名修道。若得對違順鏡、都無貪瞋愛惡、此名得道。各各返照、有病即治、無病勿藥。問曰、貪瞋等即空、便名無一切心、何必對治。答曰、若爾者、汝今忽遭重病痛苦、痛苦即空、便名無病、何必藥治。須知貪瞋空、而能發

(第七紙)

業、業亦空、而能招苦、苦亦空只麼難忍。故前圖云躰空成事。注云、如朽木上鬼全空、只麼驚人、奔走倒地、頭破額裂。若以業即空、空只麼造業、即須知地獄燒煮痛楚亦空、只麼楚痛。若云亦任楚痛者、即現今設有人、以火燒刀斫、汝何得不任。今觀學道者、聞一句違情語、猶不能任、豈況肯任燒斫者乎。〔如此者十中有九。〕

〔五七〕むすび(一)

問曰、上來所叙三種教、三宗禪、十所以、十別異、輪廻及修証又各十種、理無不窮、事無不備、研尋翫習味、足可修心。何必更集禪詮數過百卷。答曰、衆生感病、各各不同、數等塵沙、何唯八万。諸聖方便、有無量門。一心性相、有無量義。上來所述、但是題綱。雖統

疾ハ嫉、其ナシ

鏡ハ等境

勿ハ不、曰ナシ

曰ナシ、者ナシ

空ハ常空

圖ハ圖中、注云ナシ、如…  
裂ハ細字雙行  
人ハ人得

只ハ空只

況ナシ、者ナシ

九八九也

曰ナシ

種ハ重

翫習ハ玩、集…

卷ハ說藏經、及諸禪偈、曰  
ナシ、感ハ惑

題ハ提

之不出所陳、而用之千變万勢。況先哲後俊各有所長、古聖金賢、各有所利。故集諸家之善、記其宗徒。有不安者、亦不改易。但遺闕童勢者、注而圓之、文字繁重者、注而辯之。仍於每一家之首、注訝大意。題綱意在以網、不可去網在網。〔花嚴云、以大教網、漉人天魚、較涅槃岸。〕舉領意在著衣、不可棄衣取領。若俚集而不叙、如無網之網、若俚叙而不集、如無網之綱。思而悉之、不煩設難。然尅己獨善之輩、不必遍尋。若欲爲人之師、直須備通本末。好學之士、披閱之時、必須一一詳之、是何宗何教之義。用之不錯、皆成妙藥、用之差互、皆成反惡〔音汚。〕

〔五八〕むすび(二)

然結集次第、不易倫排。據入道方便、只合先開本心、次通理事、次讀法勝妙、呵世過患、以勸誠修習、後示以對治方便、漸次門戶。今所依此編之、乃學師資韶穆顛倒、文不穩便。具如六代之後、多述一真、達磨大師却教四行、不可孫為首部、祖為末篇。數日之中、思惟此事、欲將達磨宗技之外為首、又以彼諸家所教之禪、所述之理、非代代可師、通方之常道、或因修鍊功至證得、即以之示人、〔求那、惠稠、臥輪之類。〕或因聽讀聖教生解、即以之

俊ハ備

金ハ今

遺ハ遺

童ハ意

訝ハ評、題ハ提、以ハ張

在網ハ存綱、以ハ張

較ハ置

俚ハ只

而ハ之

反ハ返

倫排ハ排倫、只ハ即

以ハ次、誠ハ誠、今所ハ欲  
令

學ハ寬、韶ハ昭、文ハ友

具ハ且

首部ハ部首

道ハ道也

惠ハ僧

聖ハ經、即ハ而

攝東、〔惠聞禪師之類。〕或降其迹而適性、

一時間世警營群迷、〔志公、傳大士、王梵志

之類。〕或高其節而守法、一國中軌範僧侶、

〔廬山遠公之類。〕或其製作、或詠歌志道、

或嗟歎迷凡、或但積義、或唯勵行、或籠羅諸

教、竟不指南、或偏讚一門事不通衆、雖皆禪

門影響、仏法筌筮、若始終依之為釈迦法、即

未可也。〔天怠之教廣大、恒備無有始終、又

不在此集内也。〕以心伝嗣唯達磨宗。心是法

源、何法不備。所修禪行、似局一門、所伝心

宗、実通三学。況復尋其始、〔始者迦葉、阿

難也。〕親稟釈迦、代々相伝、一々面授。三

十七世、〔有云西國以有二十八祖者、下至伝

序中即具分析。〕至于吾師。〔緬思、何行為

釈迦三十七代之的孫也。〕故今所集之次者、

先録達磨一宗、次編諸家雜述、後写印宗聖教。

聖教居後者、如世上官司文案、曹判為先、尊

官判後也。〔唯写文尅的者有十餘卷。〕就当

宗之中、以尊卑韶穆、展転綸緒、而為次第、

其中頓漸相問、理行相參、遙相解縛、自然心

無所住。〔浄名云、貪著禅味是菩薩縛、以方

便生是菩薩解。又瑜伽説、悲増智増、互相解

縛也。〕悟修之道既備、解行於此円通。次傍

覽諸家以広聞見、然後捧読聖教、以印始終。

豈不因此正法久住。在余之志、雖無所求、然

東ハ衆

世ナシ、營ハ策

或其ハ其所、志ハ至

筮ハ筮

怠ハ台、之ハ言、大ハ本、  
恒ハ雖、無ナシ

復ハ覆

伝ハ承

以ハ已、下至ハ六

行ハ幸

七ハ八、的ハ嫡

有ナシ、卷ハ卷也

韶ハ昭、綸ハ倫、緒ハ序

問ハ問

此ハ是

聞見ハ見聞

護法之心、神理不応屈我、結襲之功、先祖不

応捨我、法施之恩、後学不応辜我。如不辜不

屈不捨、即願共諸同縁、速会諸仏会。

禅源諸詮集都序卷下

結ハ繼

会ハ会矣

下ハ下終

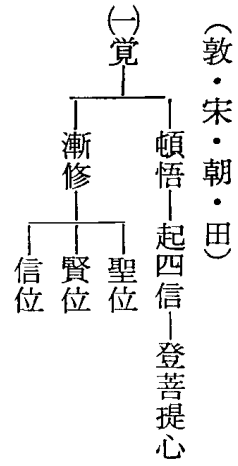
### 五 敦煌本『禅源諸詮集都序』の特色とその系統

如上的内容をもつた敦煌本『都序』の残卷は、いかなる特色を有し、どの系統に属するものであろうか。以下従来知られた『都序』の諸本と新出の敦煌本とを比較検討してみよう。

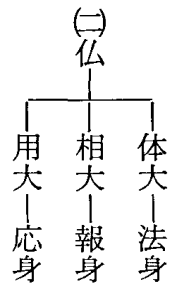
まず従来の『都序』の諸本としては、岩波文庫本において宇井氏が訳註に用いた五種、すなわち四卷本では底本とした明藏本とその校合に用いた続藏本、二卷本では駒大藏朝鮮本、元禄本、田原本をあげることができ、その内、四卷本から明藏本(明)、二卷本から駒大藏朝鮮本(朝)と田原本(田)の二本、また鎌田氏訳註本の底本とされた萬曆四年刊、宋版覆刻本(宋)の都合四本を選び出し、それに新出の敦煌本(敦)を加えた五本について、敦煌本にある五二項から五八項の内、特に顕著な異同の有無を検討してみた。その結果次のような異同の存することが明らかとなった。



〔五四〕悟りと迷いの図式



(宋・朝)

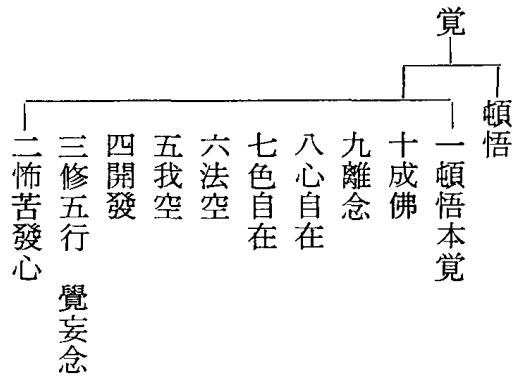


〔五七〕むすび(一)

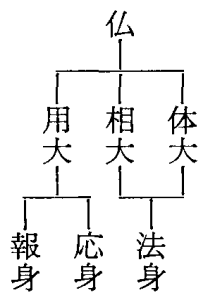
(宋・朝)

〔三〕何必更讀三藏經及諸禪偈。

(明)



(敦・田・明)



(敦・田・明)

何必更集三禪證二數過三百卷。

(田は「百卷」の下に

「耶」及び細字雙行にて

「一百六十卷」の夾註あり)

〔五八〕むすび(二)

(朝・明)

(四達摩)

達磨

(敦・宋・田)

以上の対比によって、敦煌本は田原本と最も密接であることが知られる。ただ五四項の「悟りと迷いの圖式」における圖の形式は、敦煌本は田原本よりもはるかに宋版覆刻本や駒大朝鮮本に近い。しかし、五四項の(一)の「仏」の三大、三身に関する解釈は、前掲の如く敦煌本と宋版覆刻本、駒大朝鮮本とは顕著に相違する。従ってこの点からすれば、田原本は、図の形式についてのみ独自の見地に立ってこれを整理縮少したものと考えられる。

ところでこの田原本は、前述の通り延文三年(一二五八)わが天竜寺の雲居庵にて、春屋妙葩が刊行した五山版の延文本と一致するということであり、田原本が春屋妙葩の刊行になる五山版によったとすると、新出の敦煌本と田原本との密接な関係は、妙葩刊行の五山版のオリジナルであったものが、実は敦煌本ではなかったか、という新たな推定が可能になる。しかも鎌田氏によれば、この五山版の延文本は、現存最古の刊本として、天海から青山文庫、勝鹿文庫を経て、一八八四年以後大英博物館に収蔵され、カナダ、マクマスター大学の冉雲華氏が、これに基いて英訳し出版の予定であるとい<sup>(26)</sup>う。

この推定が可能であるとするならば、現存最古の刊本である五山版延文本（一三五八）の出現と共に、更にそれをさかのぼることおよそ四〇〇年、圭峯宗密（七八〇—八四一）滅後一一年の五代後周の廣順二年（九五二）に書写された現存最古の古写本が、末尾部分の断片ながら新たに出現したことは、注目すべきことである。

先にみた宋版刊記には、裴休が唐の大中十一年（八五七）に自ら筆受し、延昌寺の老宿、唯勁禪師、契玄の手を経、契玄が顯徳元年（九五四）に呉越に入って書写し流布させたとあるが、敦煌本はそれよりも更に二年前の書写であり、宋版とは別系統のものである。

## 六 圭峯宗密の著作目録に関する新資料

前述の通り、敦煌本『都序』の卷末には、宗密の著作に関する新たな目録と題記がある。今それを示してみよう。

圭峯大師所纂集著經律論疏鈔集注解文義及圖等件列于左。

圓覺大疏三卷 大鈔十三卷 科文一卷

圓覺小疏二卷 小鈔六卷 科文一卷

圓覺禮懺文四卷

明座禪修證儀式

圓覺庶礼文十八卷

金剛經纂要疏一卷 鈔兩卷 科文一卷

唯識頌疏兩卷 鈔九卷 科文一卷

起信論疏兩卷 鈔兩卷 科文一卷

四分律藏疏五卷 律鈔玄談兩卷 科文一卷

普賢行願鈔兩卷 科文一卷

花嚴梵行願疏一卷 鈔一卷 科文一卷

花嚴經論貫五卷

涅槃經綱要三卷

注發菩提心戒一卷

注法界觀文一卷

注辯宗論一卷

禪源諸詮都序兩卷

雜述膽答法義集十二卷

道俗酬答文集十卷

集禪源諸論開要一百三十卷

三教圖一面

圓覺了義經圖一面

起信圖一卷

累代祖師血脈圖

金剛經十八注圖一面

都惣二百五十卷圖面。

廣順二年三月十日從京來漢大師智清本上抄寫。

大乘禪門要錄一卷

まず著作目録については、その最後に

都惣二百五十卷圖面。

とあることに注目したい。この卷数に関して検討してみる

に、八番目に「明座禅修證儀式」とあり、原写本は以下余白で改行し、九番目の「圓覺庶礼文十八卷」が記されているが、「明座禅修證儀式」とは『圓覺經道場修證儀』一八巻のこと、「圓覺庶礼文十八卷」とは『圓覺道場六時礼』一巻のこととみられるからして、恐らくこの筆写子が両者を混同したものとみられ、従って実際は『明座禅修證儀式』を一八巻、『圓覺庶礼文』を一巻とみるべきであろう。また圖面については、「三教圖一面」以下五種を掲げているが、三番目の「起信圖一卷」のみは「一面」といわず「一卷」といっており、これを一巻と数えると、巻数の総計はまさに「二百五十巻」となり、先の記載と一致する。

かくして宗密の著作に関する新出の目録によれば、彼の著作は、四〇種二五〇巻圖四面ということになるのである。因みに古田氏は三三種を<sup>(27)</sup>、鎌田氏は三七種を挙げられている<sup>(28)</sup>。また巻数の二五〇巻というのは、裴休の撰した『圭峯禪師碑銘』(八五五)、及びそれを承けたとみられる支磐の『佛祖統紀』(二二六九)に、「凡九十餘巻」というものよりも、はるかに多いことがこれによって知られるのである。

この著作目録では、今問題の『都序』のことを

#### 禪源諸詮都序兩卷

といっている。すなわちこれが二巻本であったことは、「禪源諸詮集都序卷下」という尾題とも一致し、敦煌本が四巻本で

なく二巻本であることを示している。

また注目すべきものに、

#### 集禪源諸論開要一百三十巻

とある。これは『圭峯禪師碑銘』『宋高僧傳』に、『禪蔵』というものを指すかとみられるが、『碑銘』ではその他の著作を含めて「凡九十餘巻」というからして、『禪蔵』の巻数は九〇巻以下の筈であり、また『新唐書』芸文志と『禪籍志』目録には、『禪源諸詮集』を「一百一卷」としているが、これとても巻数に相違があつて、はたしてこの一百三十巻本が『禪源諸詮集』そのものを指すのかどうか、必ずしも明確ではない。しかし鎌田氏によると、『禪蔵』の存在を肯定した学者に前述の冉氏があるということであり、裴休の叙の巻頭には、

圭峯禪師集禪源諸詮為禪蔵、而都序之。<sup>(30)</sup>

といい、また朝鮮の『禪門寶藏錄』にも、

圭峯禪源諸詮集序及本録<sup>(31)</sup>

とあることからすれば、『禪源諸詮集』と『禪蔵』とは同一のものと考えられ、それと敦煌本にいう『集禪源諸論開要』一百三十巻とは、これまた同一のものであろう。

次に「累代祖師血脈圖」というのは、『中華傳心地禪門師資承襲圖』を指すものとみられるが、従来の諸資料にその名を明記したものがなく、宇井氏も『第三禪宗史研究』では、

『承襲圖』の名は後人の不注意による命名で、元来の題名はなかったであろうと推定され、<sup>(32)</sup>また鎌田氏は、『林間録』巻上に「圭峯答裴相國宗趣状」とか「草堂禪師牋要」の名で『承襲圖』が引用され、「中華傳心地禪門師資承襲圖」の名は、朝鮮においてつけられたのではないかと推定されているが、<sup>(33)</sup>既に古く中国でこのような名称で呼ばれていたことがこの目録の出現によって知られるようになったのである。

最後に、尾部の

廣順二年三月十日、從京來漢大師智清本上抄写。

という奥付と

大乘禪門要録一卷

という尾題について考察しよう。

先に潘氏は、この智清は写經人ではなく、「大乘禪門要録」というのもこの卷子の經名ではない、従って、本書を智清の抄写した「大乘禪門要録一卷」とみるのは誤りであって、「禪源諸詮集都序卷下」が正しいとされたが、たしかにその内容は圭峯宗密の『禪源諸詮集都序』巻下の末尾部分である。しかしこの巻末題記を卒直に読むならば、『都序』とそれに続く宗密の著作目録を含む全体が、「大乘禪門要録」の名で呼ばれ、後周太祖の廣順二年（九五二）三月一〇日に、京より來れる漢大師智清の抄写したものである、とみるのが妥当であると考えられる。潘氏は智清が写經人ではないといわれるが、

今智清その人についてはそれを徵する手だてがない。ただ京より來れる漢大師という以上、恐らくこの写本は、敦煌での書写になるものであろう。後周太祖の廣順二年（九五二）といえ、禪宗燈史の代表作である靜・筠二禪徳による『祖堂集』二〇巻の成立した年であり、宗密滅後一一一年である。尾部の断片とはいえ現存最古の写本であることは間違いない。こうした古写本の出現、更には滅後一一〇年当時に存在した宗密の著作目録が、新たに知られるに至ったことは、極めて大きな意義と価値があるといえよう。

〔註〕

- (1) 宇井伯壽譯註『禪源諸詮集都序』（岩波文庫、昭和一四年一月、岩波書店）二二七―二三六頁参照。
- (2) 古田紹欽「圭峯宗密の研究―法系・行狀・著作・弟子等に就て―」（『支那仏教史学』二卷二号、昭和一三年五月）八三―九七頁参照。
- (3) 黒田 亮「禪源諸詮集都序について」（『禪門寶藏録引用書目』（『朝鮮舊書考』、昭和一五年一月、岩波書店）一一五―一二七頁参照。
- (4) 宇井伯壽「中華傳心地禪門師資承襲圖の佚文について」（『第三禪宗史研究』、昭和一八年四月、岩波書店）二二二―二三三頁参照。
- (5) 宇井伯壽 前掲書四七七―五〇九頁参照。
- (6) 鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』（昭和五〇年三月、東京大学出版会）序一頁。

(7) 鎌田茂雄 前掲書一七五―二六六頁参照。

(8) 宇井伯寿譯註 前掲書二四〇頁。

(9) 鎌田茂雄 前掲書六八頁。

(10) 宇井伯寿譯註 前掲書二二九頁。

(11) 鎌田茂雄譯註『禪源諸詮集都序』(昭和四一年一二月、筑摩書房)二六〇頁。

(12) 宇井氏は、岩波文庫の譯註本二二九頁では、契玄を「玄契が真の名ならん」とされたが、黒田亮氏の指摘により、後の『第三禪宗史研究』五〇七頁では、これを再び契玄と訂正された。

(13) 宇井伯寿譯註 前掲書二二八―二二九頁、宇井伯寿『第三禪宗史研究』五〇七―五〇八頁、鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』二四二頁各参照。

(14) 宇井伯寿譯註 前掲書一六六頁。

(15) 宇井伯寿譯註 前掲書二二八頁参照。

(16) 鎌田茂雄 前掲書九六頁参照。

(17) 宇井伯寿譯註 前掲書一六六頁。

(18) 宇井伯寿譯註 前掲書一六八頁。

(19) 宇井伯寿譯註 前掲書一六八―一七〇頁。

(20) 黒田 亮『朝鮮舊書考』(昭和一五年一月、岩波書店) 二六―二七頁参照。

(21) 牧田諦亮「台北中央図書館の敦煌經」(『印度学佛教学研究』一八卷二号、昭和四五年三月)一九七―二〇二頁参照。

(22) 牧田諦亮 前掲論文一九七―一九八頁参照。

(23) 潘 重規「國立中央圖書館所藏敦煌卷子題記」(『敦煌學』二

輯、一九七五年一二月、香港)一―五五頁。

(24) 牧田諦亮・楊 鍾基譯「臺北中央圖書館之敦煌經」(『敦煌學』二輯、一九七五年一二月、香港)七四―七九頁。

(25) 潘 重規 前掲論文五一頁。

(26) 鎌田茂雄 前掲書一〇一頁注参照。

(27) 古田紹欽 前掲論文八九―九一頁参照。

(28) 鎌田茂雄 前掲書八二―八四頁参照。

(29) 鎌田茂雄 前掲書八六頁参照。

(30) 宇井伯寿譯註 前掲書四頁。

(31) 黒田 亮 前掲書一一三頁。

(32) 宇井伯寿 前掲書四八八―四八九頁参照。

(33) 鎌田茂雄 前掲書一〇〇頁参照。